



新宮町史の編纂事業(第2章自治体・地域住民と連携した新たな自治体史編纂や地域歴史博物館形成事業)

奥村, 弘
河野, 未央

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 5(平成18年度事業報告書):80-80

(Issue Date)

2007-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002258>



新宮町史の編纂事業

『播磨新宮町史』本文編（近現代）

近現代史部会では、前年度までの新聞史料調査、各種史料保存機関調査、聞き取りなどの成果を踏まえ、各執筆者で引き続き調査を進めると共に、執筆にも着手した。その結果、明治後期と大正期については、一部の原稿が脱稿し、あらかじめ協議して決定した判型とデザインに従って組版が行われ、サンプルとして提出された。

年度前半には、不足する史料（特に戦後部分）の発掘と調査のため、執筆者が何度か現地に足を運んだ。庁舎の移転にともない整理された書庫の中から、新しく戦後の行政史料が発見されたなどの成果もあった。また、執筆者間の意見交換、町史編集室との間の調整、進捗状況の確認などのため、町史編集室の担当者を交えながら、神戸と現地で4回の部会を開催した。

こうした取り組みの中で、課題も明らかとなった。これまで、近代・現代の史料調査は戦前が中心であり、戦後の史料については十分に整理されておらず、新聞記事の検索も行われていなかった。戦後部分を補うため、前年度末に行われた梅村忠男前町長へのインタビューについても、内容の整理や検証など、利用と掲載に当たってはいくつかの課題があり、それを解決する課題も残っている。

戦後部分の史料の概要を早急に明らかにしてその調査を進めると共に、町史編集室と神戸大学との役割分担（戦後部分の執筆分担など）などの懸案事項を解決し、執筆・刊行に向けて早急に体勢を整え、準備を進めていくことが課題である。

（文責・奥村弘）

神戸大学近世地域史研究会

近世地域史研究会は『新宮町史』の活用を目的とした継続事業として昨年度に立ち上げられ、今年度本格的に活動を開始した。参加者は毎回15名前後。『新宮町史』の執筆メンバー（近世担当）を中心に学生・院生、と市民の方々から構成され、地元の方の参加もある。研究会は、古文書の

判読に特化することなく、ひろく「歴史研究」の場としていくことを目標としたことから、研究の方法論等をめぐって、時には学生・院生の側から市民の方々に対して厳しい言葉がとぶこともあった。しかし、同会はそのような発言すら活発な議論のひきがねとなるような、和気藹々とした雰囲気の中に進められており、この間着実に成果を挙げている。

本年度の活動としては『新宮町史』（近世）に抄出されたの池田家「系譜」及び「系譜続録」等の翻刻と、『新宮町史』（近世）の冒頭解説について節ごとの論評を行った。

当初は執筆メンバーや学生・院生を中心に報告を行ってきたが、会を重ねるうちに市民の方々も交えて全員で報告の順番をまわすようになった。どなたも非常に熱心で、自ら持ち込みで研究報告（書評）をされた方もあった。なお「系譜」及び「系譜続録」については本年度で翻刻が終了している。来年度は引き続き池田家に関する史料の翻刻を続け、ある程度まとまった段階で印刷物としての発行を目指す。その際必要となるデジタルデータは、参加者で分担して作成、校正も同様に行う予定である。

大学で行っているこうした活動と地元とをどのようにつなぎ、展開させていくかは今後の課題である。しかし、来年度は参加者による旧新宮町域の巡見も予定しており、そうした巡見の場で、地域の方々との交流会を持つことができればと考えている。

（文責・河野未央）

播磨国風土記研究会

第8章（152頁）参照。